

2022. 2. 20. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書8章27～30節
『わたしとは誰なのか』

本日の聖書の箇所はユダヤ最北端の町から語り出されようとしています。22節のベトサイダはガリラヤ湖北端の町ですから、それよりさらに遡って、この27節に描かれる「フィリポ・カイサリア地方の方々の村」へとイエス一行は歩みを進めます。

フィリポ・カイサリアというのはヨルダン川の水源にあたり、パニアスという多産の神パンの聖所がありましたし、また、建築マニアのヘロデ王がローマ皇帝アウグストゥスの神殿を建てたところでもあります。このように異教とこの世の権力を代表する町でもありました。

しかし、そこまで大きく構えて考える必要もないと思います。おそらくユダヤ教の締め付けの弱い北の果ての小さな村であったからこそ、初代教会の自由な教育や働きの方がようやく確保出来ていたのではないかと思います。

本日の物語は、イエス一行がその村を目指す途上での出来事なのです。

イエスは「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と弟子たちに尋ねます。彼らはそれぞれに「ヨハネ」だとか「エリヤ」などと適当に答えます。それは自分が問われていないからです。所詮、他人事でしかないのです。しかし、ここでイエスは問います。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と。

この問いの文章は文法的には「あなたがた」を文頭に配置して、この問いに答えるのは問われている「わたし」であることを強調しています。

『わたし』が応える課題」にペトロは答えます。「あなたは、メシアです」。この答えは正解です。しかし、間違いです。分かり易く言えば、答えは正解ですが、ペトロ自身がその意味を理解し、生かされてあるという経験が全然出来ていないのです。そのため、次の32～33節でイエスに叱られるペトロの姿をマルコはあえて記します。

このペトロの告白は初代教会の第一世代の告白そのものです。ここにはまだ具体性、つまりイエスの十字架と復活が欠乏している不十分なもののなので

す。ですから、次の31節で死と復活が予告された時、ペトロはイエスをいさめたのです。

わたしたちは神を信じると告白します。しかし、神を信じると言う人がすべからず神を信じているわけではありません。実は、神に生かされている人が神を信じていると言った方が良いでしょう。そして、神に生かされている人は神について語らないで、神に生かされている自分自身を語るのではないのでしょうか。

信仰を告白してゆくという課題は、神の問題でも人間の問題でもありません。そうではなく、自分自身の問題なのです。ましてや押し付けられた信仰を告白することなど愚の骨頂です。「わたしとは誰なのか」という問いに主体性をもって日常的に晒されてゆく途上に見出しゆくものではなかったのでしょうか。

信仰をおびやかすものは従って、無神論でも科学でもないし、多忙な生活でも欲望でもありません。それは自分自身を批判吟味することに時間と労力を費やすことをムダと考えて、簡単に自分を通過させてしまうことなのです。

わたしたちは受難節という十字架の出来事を目前に控え、「イエスは誰であるか」と問われ「キリストである」と応える「わたし」とは誰なのかをわきまえ知りたく願います。